2000 年代における生活困窮者の析出過程

――首都圏・一時宿泊施設利用者の生活歴に注目して――

東洋大学　渡辺芳

１．目的

本報告の目的は、2000 年代の首都圏における一時宿泊施設利用者の生活歴から、その生活困窮過程の類型を析出することにある。野宿者／ホームレスに代表される「不定住型貧困」（岩田正美 1995）の様態は、2000 年代以降にどのように変化をしたのか、実態に即して理解をすることにしたい。

本報告の対象となる一時宿泊施設（以下、A施設）は、2004 年から 2009 年の５年間にわたって、駅の再開発に伴って設置され、駅周辺に「居住」した野宿者／ホームレスを対象とした。A施設は、一時宿泊型のシェルターとグループホームを設置して、アフターケアと地域移行を視野にいれた事業展開を行っていた。

２．方法

本報告では、A施設の利用者台帳記録から、年齢、性別、移動歴、職歴、居住歴、福祉制度利用の有無等を把握し、統計的処理によって生活記録の型を取り出した。それにあわせて、面接担当者（生活相談員、ＮＰＯの巡回相談員等）による自由記述の分析を行った。調査にあたっては、個人情報の保護に努めた。

３．結果

A施設利用者は、土木・建築の日雇いに従事し、簡易宿泊所と野宿とを往復する生活が常態化した者が数多くいたが、次第に、軽度の障害者、ＤＶ被害者、認知症高齢者が増えていく。施設閉鎖が近づくにつれて、一層この傾向が強くなり、支援体制が整備されるにつれて、利用者数が激減した。特に緊急枠での利用者は、A施設の利用後、他施設への入所や生活保護受給に至る場合が多く、A施設は振り分け施設としての性格を持っていたといえる。

利用者像については、労働形態は、直前職が建築・土木職とする者が多数を占め、最長職は、建築・土木の他に、製造業や技能職などであった。居住歴は、出身地を離れて首都圏での生活が長い者が多い。家族関係は希薄であり、生活困窮に至った場合の支援を期待できない状態にあった。福祉制度利用については、他の自治体での利用を含め、複数回の利用歴のある者が一定数見られた。

４．結論

2000 年代の生活困窮者は、建築日雇いの単身中高年男性という典型的な姿から、多様化する生活困窮者像をみてとることができる。福祉制度の利用がしにくい人々の最終的な受け皿として、A施設は機能したといえよう。

＊本報告は、2014 年度文部省科学研究費「現代日本社会における社会的排除状況の析出過程」（代表研究者：渡辺芳／研究課題番号：26380702）、ならびに 2014 年度東洋大学井上円了記念助成金の助成（研究代表者：渡辺芳／研究課題：「現代日本における野宿者／ホームレスの析出過程」）を受けたものである。当日は詳細なレジュメを配布し、報告する予定である。

参考文献

・岩田正美, 1995,『戦後社会福祉の展開と大都市最底辺』ミネルヴァ書房。
・岩田正美・西澤晃彦編著, 2005,『講座・福祉社会第 9 巻　貧困と社会的排除――福祉社会を蝕むもの』ミネルヴァ書房。
・　西澤晃彦, 2010,『貧者の領域――誰が排除されているのか』河出ブックス。